大学生親子が捉える「大学生の親としての役割」の探索的検討

○池上真平¹・高田治樹²・水本深喜³・正木澄江⁴

(¹ 青山学院大学・²立教大学・³国立成育医療研究センター・⁴文教大学)

キーワード：親役割，子離れ，親離れ

An exploratory study on roles of college students' parents

Shimpei Ikegami¹, Haruki Takada², Miki Mizumoto³, Sumie Masaki⁴

(¹Aoyama Gakuin University, ²Rikkyo University, ³National Center for Child Health and Development, ⁴Bunkyo University)

Key Words: parental role, separation from children, independence from parents

目 的

親役割に関する研究は、乳幼児期や中学・高校生の親を対象としたものが多い一方で（たとえば谷井・上地, 1993），大学生の親を対象としたものはほとんど見当たらない。

本研究は、親子それぞれが大学生の親の役割をどのように認識しているのかを捉え、さらに親離れ・子離れとの関連についても検討することとした。

方 法

調査手続き・調査対象者 本研究ではスノーボール・サンプリングを用いて調査を実施した。私立大学4校の大学生373名（年齢 $M = 19.45$, $SD = 0.98$ ）とその母親128名（年齢 $M = 51.15$, $SD = 4.03$; 回収率34.3%）から調査票が回収された。

調査項目 大学生・母親ともに、親離れができていと思うか、および子離れができていと思うかについて、二値法により回答を求めた。さらに、大学生の親にはどのような役割があると思うかについて自由記述により回答を求めた。

結果と考察

親役割のカテゴリ分類 親役割について、318の記述が得られた（子249個、親69個）。記述内容に基づき15のカテゴリを生成し、一つ一つの記述が各カテゴリに該当するかどうかを判定した。なお、3つのカテゴリは該当率が低かったため、以降の分析から除外した。

子離れと親役割の関連 回答者を「親か子か」と「子離れができていかどうか」の組み合わせにより4群に分類した。

Figure 1 親子の子離れ認知と親役割との関連

群ごとに各カテゴリの該当数を集計し、双対尺度法を用いて分析した。得られた布置 (Figure 1) より、4群が離れて布置されたことが見て取れる。このことから、親役割についての認識は子離れの前後で変化するものであり、また親子間でも一致しないと考えられる。例えば、自分の親が子離れできていないという子は「主体性の尊重」や「自立の促進」を親役割と認識しているのに対し、自分は子離れできていないという親は「人生の先輩として助言」することを親役割と認識しているようであった。このような親子間の認識の違いは、親子間で欲求不満や葛藤を生じる一因になりうると示唆される。

親離れと親役割の関連 回答者を「親か子か」と「親離れができていかどうか」の組み合わせにより4群に分類し、子離れと同様の方法で分析した (Figure 2)。親離れできていない子と親離れできている子は、離れて布置された。このことから、子は親離れの前後で親役割についての認識が変化すると考えられる。例えば親離れできていない子は、「子の見守り」や「自立の促進」を親役割と認識しているのに対し、親離れできている子は、「社会常識の提示」や「生活サポート」を親役割と認識しているようであった。一方、親の場合は、子が親離れしているかどうかによって親役割についての認識がほとんど変わらないようであった。

引用文献

谷井淳一・上地宏昭 (1993) . 中・高校生の親の自己評定による親役割診断尺度作成の試み カウンセリング研究, 26, 113-122.

Figure 2 親子の親離れ認知と親役割との関連